

## 戦後始発期の国定教科書にみる学校教育像

—国語教科書におけるデンマークに着目して—

久保田 治 助〔鹿児島大学教育学部(地域社会教育)〕・木村 陽子〔埼玉東萌短期大学〕

### The school education image seen to the national authorized textbook of a first train term after the war: Denmark in a language textbook

KUBOTA Harusuke · KIMURA Yoko

キーワード：国語科教育、国定教科書

#### 1

それまで事実上文部省の独占となっていた日本の国定教科書に対して、1946(昭和21)年3月5日と7日に来日した第一次アメリカ教育使節団は廃止を求め、教科書検定制を導入せよと勧告した。それを受けて1947(昭和22)年3月31日に公布され、翌4月1日から施行された学校教育法のなかにも検定制の導入が明示されたが、同4月からの新学制(6・3・3・4制への変更、義務教育の9年への延長など)の発足には間に合わず、実際には1949(昭和24)年4月からの開始となった。これにより、1904(明治37)年にはじまり長く使用されてきた国定教科書は姿を消した。

しかし、そのような連合軍総司令部の意向が示される以前に、それとは無関係に日本側の〈自主的措置〉として、文部省は1945(昭和20)年9月15日の「新日本建設の教育方針」で戦後教育の基本方針を明らかにした。この中では〈国体護持〉、〈平和国家の建設〉、〈国民の教養の向上〉、〈科学的思考力の涵養〉、〈平和愛好の信念の養成〉などが教育の重点目標として掲げられた。つづいて9月20日、文部省は当面のあいだ教育現場で暫定的に使用せざるを得ない戦中來の国定教科書の具体的な削除箇所を指示するとともに、取り扱い上注意すべき基準として、(1)国防軍備を強調し、(2)戦意高揚を図り、(3)国際の和親を妨げ、(4)敗戦にともなう現実と遊離しまたは児童・生徒の生活体験とかけ離れた教材を挙げ、その具体例も併せて示した。

そのような経緯を経て再始動した戦後始発期(ここでは1949年から1960年に限定する)の学校

教育であったが、戦時教育体制から平時体制へと短日月で復帰しなければならなかったのみならず、〈平和国家の建設〉や〈平和愛好の信念の養成〉といった、教科書編纂者たちにとっても決して既知とは言い難かった新しい価値観に基づいた教材を速やかに作成しなければならなかったことは、今日から想像する以上に困難な作業であっただろうと推察される。特に、幼いころから諸外国への敵愾心を植えつけられ、戦争や軍隊への親近感を抱かせるような教育を受けてきた国民学校世代(「小国民」世代)を、どのように〈平和愛好者〉へと再教育していけばよいかという問題は、当時の教育学者たちにとっての最重要懸案事項であった。そして、そうしたゆがんだ諸外国イメージを〈思想矯正する場〉として、新制小・中学校の国語科授業が期待されたのである。

試みに1950年代の小・中学校国語教科書を調べると、管見のかぎりでは計22種(小：9種/中：13種)の〈アメリカ〉教材(アメリカという国やそこに暮らす人々の特徴を伝えることを目的とした教材)を確認した<sup>1</sup>。具体的に挙げると以下の〔表1〕のとおりである。

同様に、計25種(小：2種/中：23種)の〈イギリス〉教材を収録した国語教科書を確認した<sup>3</sup>。周知のとおり、戦時下には「鬼畜米英」、「出てこいミニッツ・マッカーサー、出てくりゃ地獄へ逆落とし」等々の英米を敵対視するスローガンが広く人口に膾炙し、その影響を真っ向から受けて育った子どもたちの対米英意識には甚大なゆがみが生じていた。上記のタイトルを眺めても推測可能なように、1950年代の小中学校国語教科書に掲

〔表1〕1950年代の小中学校国語教科書に掲載された〈アメリカ〉教材の一覧<sup>2</sup>

使用開始年	著者	タイトル	小中	出版社	教科書名	
1	50	浅井治平	アメリカの旅	中	愛育社	中学の国語 一下
2	50	石井房子	アメリカの町々	小	二葉	国語の本 六年上
3	50	厨川白村	アメリカの印象	中	秀英	私たちの国語 三上
4	51	厨川白村	アメリカの印象	中	秀英	私たちの国語 三上
5	51	栗栖アリス	アメリカだより	中	教図	中学総合国語 五
6	51	栗栖アリス	アメリカの宝庫	中	教図	中学標準国語 一上
7	51	坂井米夫	アメリカだより	小	学図	六年生の国語 下
8	51	坂井米夫	アメリカだより	中	市ヶ谷	中学現代国語 3下
9	52	坂西志保	アメリカだより	小	日書	太郎花子国語の本 下
10	52	坂西志保	アメリカだより	小	日書	太郎花子国語の本 四下
11	52	坂西志保	アメリカの子どもたち	小	日書	太郎花子こくごの本
12	52	坂西志保	アメリカの子どもたち	小	日書	太郎花子国語の本 六上
13	53	坂西志保	アメリカの年中行事	小	学図	五年生の国語 下
14	53	坂西志保	クリスマスおめでとう	小	二葉	国語 六年下
15	53	中谷宇吉郎	アメリカ	小	二葉	新編国語の本 5年1
16	53	中谷宇吉郎	アメリカの旅	中	学図	中学国語 二下
17	55	中谷宇吉郎	アメリカの旅	中	大修館	新中学国語 三上
18	55	中谷宇吉郎	アメリカの旅	中	大修館	改訂新中学国語 三上
19	56	西本三十二	アメリカだより	中	教図	改訂版中学標準国語 一上
20	50	福沢諭吉	初めてアメリカに渡る	中	東書	新しい国語 二年下
21	53	福沢諭吉	初めてアメリカに渡る	中	東書	改訂新しい国語 中学二年下
22	57	福沢諭吉	初めてアメリカに渡る	中	東書	新編新しい国語中学 二年下

載された〈アメリカ〉教材では、同国の広い国土と豊かな自然、恵まれた農産物とそれを享受する国民の豊かな暮らし向き、さらには飛行機や自動車や吊り橋など近代文明の発達強調して描かれている。これらの教材の選定意図が、子どもたちの〈敵愾心〉を〈憧憬〉へと転化させようとするものであることは見て取りやすい。

その一方で、本稿が注目するのは、1950年代から60年代初頭における小・中学校国語教科書に掲載された〈デンマーク〉教材の意外なまでの多さである。その結果を以下の〔表2〕にまとめてみた。

管見のかぎりでは、1950-60年代の小中国語教科書に計27種（小：8／中：19）の〈デンマーク〉を扱った教材がある<sup>5</sup>。たしかに、デンマークは国土面積が世界で130位（43094km<sup>2</sup>）、人口が世界で108位（550万人）と規模こそ小国ではあるものの、童話作家アンデルセンの母国としても知られ、また2006年に発表されたイギリス・レスター大学による「幸福度調査」では医療費無料制度、世界最高水準の国民1人当たり国内総生産（GDP）、高い教育レベルなどの理由から、178か国中で世界第1位に選ばれるなど（日本は90位）、世界から好評価を得ている国であることは

〔表2〕1950年代から60年代初頭における小中学校国語教科書に掲載された〈デンマーク〉教材の一覧<sup>4</sup>

使用年度	著者	タイトル	小・中	出版社	教科書名	
1	51-52	高橋健二	デンマークの二本の柱	小	二葉	国語の本 十
2	53-60	高橋健二	デンマークの二本の柱	小	二葉	改訂版国語の本 五年下
3	51	高橋健二	デンマークの柱	小	学図	国語 十二
4	56-60	高橋健二	デンマークの柱	小	二葉	新編国語の本 5年Ⅱ
5	52-60	高橋健二	緑のデンマーク	小	学図	六年生の国語 下
6	55-56	高橋健二	緑のデンマーク	小	学図	小学校国語 六年下
7	57-60	高橋健二	緑のデンマーク	小	学図	小学校国語 六年下
8	59-60	武内利栄	デンマークはいいなあ	小	学図	わたしたちの国語 六年下
9	57-61	内村鑑三	木を植えて国を興した話	中	筑摩	国語 三上
10	54	内村鑑三	興国のもみ	中	開隆堂	新しい中学国語 文学二
11	55	内村鑑三	興国のもみ	中	開隆堂	新しい中学国語 文学二
12	56	内村鑑三	興国のもみ	中	開隆堂	新しい中学国語 文学二
13	56-61	内村鑑三	祖国の再建—デンマルクの話	中	秀英	私たちの国語 三年下
14	53-61	内村鑑三	デンマーク国の話	中	東書	改訂新しい国語 中学三年上
15	57-59	内村鑑三	デンマーク国の話	中	東書	新編新しい国語 中学三年上
16	60-61	内村鑑三	デンマーク国の話	中	東書	新編新しい国語中学三年上 新訂版
17	66-68	内村鑑三	デンマーク国の話	中	東書	新編新しい国語 中学三年
18	55-57	内村鑑三	デンマークの話	中	愛育社	中学の国語総合 三下
19	58-59	内村鑑三	デンマークの話	中	教図	中学の国語 三下
20	51	内村鑑三	樅を植える話	中	日書	国語生活 一年下
21	52	内村鑑三	樅を植える話	中	日書	国語生活 文学編一年下巻
22	62	内村鑑三	もみの木	中	教図研	新中学国語 二
23	59-61	高橋健二	デンマークの二本の柱	中	中教	中学国語 一年上
24	50-52	大谷英一	平和の国デンマーク	中	大修館	中学国語 三上
25	52-60	大谷英一	平和の国デンマーク	中	大修館	新中学国語 三下
26	55-61	大谷英一	平和の国デンマーク	中	大修館	改訂新中学国語 三上
27	58-61	大谷英一	平和の国デンマーク	中	大修館	新中学国語総合新訂版 三下

まちがない。実際、1950-60年代の教材のなかにもすでに「世界一国民が幸福な国」という評価が散見している。

一例として、二葉株式会社から刊行された小学校5年生用の国語教科書（『国語の本 十』と『改訂新国語の本 五年下』）に、1951年から60年まで掲載された教材、高橋健二<sup>6</sup>著「デンマークの

二本の柱」の冒頭部を以下に挙げる。

世界中でいちばん小さい国のひとつでありながら、世界中でいちばん幸福な国のひとつ。／ひとしづくの石油もわかず、石炭も鉄こうもほとんど全く出ず、水力電気にもぜんぜんめぐまれていないというふうには、近代産業の栄える条

件が欠けているのに、こじきはもとより、ひどい貧ぼう人のいない、もっとも豊かな国のひとつ。／トマトやブドウがほとんどみのらず、満州でさかんに作られるダイズやトモロコシさえも、花はさくが、実はみのらないというふう

に、気候風土にもめぐまれない国でありながら、世界第一の農業もはん国といわれる国。／そのデンマークもはじめから幸福な国だったのではなく、むしろ歴史をさかのぼれば、もっとも不幸な国の一つであり、ことに今から八十年ほどまえ、戦争に負けたあとなどは、全くみじめな国でした。たびたびの戦争につかれていた上に、敗戦のだけきを受け、国民はすっかり気力を失い、国としてはもう立ちゆくみこみがないと思われるほど、どんぞこに落ちこんだデンマークが、わずか数十年の間に、どうして幸福な平和な国をきずくことができたのでしょうか。

(112-114頁)

一読して明らかなように、本教材が主眼を置いているのはデンマークの〈豊かさ〉や〈幸福さ〉よりもむしろ天然資源や気候風土の点、さらには敗戦に基づく〈貧しさ〉〈不幸さ〉〈みじめさ〉であり、そうした「どんぞこ」状態からいかにして彼の国がめざましい復興を遂げることができたのかということである。つまり、敗戦直後の国語教科書編纂者たちは、かつて自分たちと同様の「全くみじめな」敗戦国であったデンマークに自らの現在の姿を重ねるとともに、敗戦後、短期間で「世界でいちばん幸福な国」、「世界第一の農業もはん国」、そして「もっとも豊かな国のひとつ」にまで発展を遂げたデンマークの躍進を、教材を通して次代を担う子どもたちに語ることで、〈自国もまた短期間のうちに大復興を遂げようではないか〉という強いメッセージを発信したのである。換言すれば、前掲文の中の言葉は、デンマークのことであっても実は日本のことなのである。

「敗戦のだけきを受け、国民はすっかり気力を失い、国としてはもう立ちゆくみこみがないと思われるほど、どんぞこに落ちこんだ」日本が、どうやったら「幸福な平和な国をきずくことができ」るのか。そのヒントをデンマークの復興の過程に

探るとともに、必ずや自分たちも日本を「幸福な」「平和国家」へと変えてみせようという、子どもたちに勇気と希望を与えることを目的とした教材であると考えられよう。

## 2

では改めて、敗戦後の日本がデンマークを自分たちがこれからめざすべき〈理想国〉として再発見してゆく過程を以下に見て行きたい。

〔表2〕からも明らかなように、1950年代から60年代初頭にかけて、実に14種もの中学校国語教科書が、上述した趣旨に基づいた〈デンマーク〉教材として内村鑑三<sup>7</sup>の文章を収録している。ちなみに、これらはすべて内村が1911(明治44)年10月22日に東京柏木の今井館<sup>8</sup>で行った講演記録で、同年11月号の『聖書之研究』(内村が刊行した日本で最初の聖書雑誌)第136号に掲載された「デンマルク国の話——信仰と樹木をもって国を救いし話」(以下、「デンマルク国の話」と略)からの抄録となっている。試みに、1953年から1961年にかけて使用された『改訂新しい国語 中学三年上』(東京書籍、柳田国男編)に収録された「デンマーク国の話」の冒頭部を見てみたい。

(前略) ある人の言いまするに、デンマーク人はたぶん世界の中で最も富んだ民であるだろうとのことであります。すなわち、デンマーク人ひとりの有する富はドイツ人または英国人または米国人ひとりの有する富よりも多いのであります。(中略)しかるに今を去る四十年前のデンマークは、最も哀れな国でありました。千八百六十四年に独逸の二強国の圧迫するところとなり、その要求を拒んだ結果、ついに開戦の不幸を見、デンマーク人はよく戦いましたが、しかし弱はもって強に勝つあたわず、デッペルの一戦に北軍敗れて再び立つあたわざるにいたりました。デンマークは和を請いました。戦争はここに終りを告げました。しかしデンマークはこれがために窮困の極に達しました。もとより多くもない領土、しかもその最良の部分を持ち去られたのであります。いかにして国運を回復せんか、いかにして敗戦の大損害を償わん

か、これこの時にあたりデンマークの愛国者が、その脳漿をしぼって考えた問題でありました。国は小さく、民は少なく、しかして残りし土地に荒漠多しというありさまでありました。国民の精力はかかる時にためされるのであります。戦いは敗れ、国は削られ、国民の意気銷沈し、なにごと手のかざる時に、かかる時に国民の眞の値打ちは判明するのであります。

(中略) 戦いに敗れて、精神に敗れない民が眞に偉大なる民であります。国が興るか滅びるかはこの時に定まるのであります。(10-11頁)

前掲、高橋健二の文章は、この内村の「デンマルク国の話」に基づいた翻案であるとされる。だとすれば、前掲〔表2〕に挙げた27教材のうち実に22教材が、内村鑑三が明治44年に行った講演記録に基づいた文章を出典としていると言えるのである。

ではなぜ、敗戦後の小・中学校の国語教科書は、これほどまでに内村の「デンマルク国の話」に強い影響を受けたのだろうか。その理由の一端を、内村鑑三の没後20年記念として1950年4月号『独立』第14号に掲載された「デンマルク国の話」を対象とした「研究座談会」での議論のなかに探ってみよう。

なお、同座談会は基督教政治社会問題研究会の月例会として同研究会会員たちによって行われたものであり、参加者計12名の顔ぶれを眺めると、〔食糧公団総務局長〕、〔『聖書之言』主筆〕、〔立教大学教授〕、〔理学博士〕、〔明治学院大学教授〕、〔医学博士〕、〔『聖書の日本』主筆〕、〔元日埃協会理事〕、〔元三井物産常務〕・・・といった肩書きからも、同会がキリスト教信徒を中心とした産官学連携の研究会であったことが窺える。本座談会のなかで食糧公団総務局長である渡辺五六は次のように述べている。

私が上海に昭和十五年から終戦後八カ月、昭和二十一年の四月までおりまして、終戦後の日本を上海で心配しながら見ておったわけなんです。前から日本の食糧問題を自分の専門としておった関係上、終戦後の日本の食糧事情とい

うものをしじゅう思い浮べては、朝鮮を失い台湾を失った日本が今後どうして同胞を養って行くかということについて、常に悩んでおったわけなんです。そのときに思い出したのが内村先生の『デンマルク国の話』でありました。この本は上海には持って行っておりませんでしたので、前に一度読んだだけでそう頭にピンと残っておったわけでもありませんが、とにかくデンマークは木を植えて国を復興したという記憶だけは残っておりました。(中略) そこで日本に帰って来て、早速この先生の『デンマルク国の話』を引っ張り出して読んで見ました。ところが前に読みました時と違ひまして、ほんとうに腸にしみわたったような気がいたしました。これこそほんとうに、先生は明治四十四年にお書きになったのだが、敗戦後の日本の国民に遺言をしておいてくださったものじゃないか、それをわれわれはただ封を切らずにおったのじゃないかという感じがいたしました。(11-12頁)

あるいは、『聖書之言』主筆・石原兵永は次のように述べている。

私も以前に読んだ時にはただ感心な話だと思っただけでそれほど深い現実的意味があるとは自覚しなかったのでありますが、敗戦という事実直に直面いたしましたもう一度振り返ってみると、実に大きな預言としてわれわれに訴えて来るのを痛切に感じたわけです。(中略) もう一つは日本と関連し考えてみまして、両方とも農業国であるという点、両方とも敗戦国であるという点、敗戦から復活しなければならない運命をもつ日本と、すでに敗戦からの復活が、ただ農業技術といったことだけでなしに、精神的な、教育的な、宗教的なものがその背後にあったという点で、日本の将来の復興の模範となる、日本もやはりそういうところに中心が置かれなければならないということを感じました。

(12-13頁)

同様の感慨は、本座談会に参加していたほとん

どの発言者の口からも述べられている。他方、同座談会の中で司会の鈴木俊郎は、内村が自身の日記（大正14年6月1日）の中に「朝鮮の〇〇〇〇君より自分の著した『デンマルク国の話』が原因の一つとなって、朝鮮半島に毎年一億六千万本の有用樹木の苗木が植付けらると聞いて非常に嬉しかった」、「斯くて今より百年後には自分を国賊と呼んで窘めし日本人は、自分の書いた小著述の結果として数十億の富を得るに至るであろう」と記していたことに言及している。

つまり、1911年に発表された内村鑑三の「デンマルク国の話」は、もともと内村が宗教界のみならず言論界でも影響力をもった有名人であったため、同時代においても内地・外地の知識人たちのあいだで知られ、すでにそれなりの影響力を持っていたが、しかしそこで言及された敗戦後のデンマークの状況が、思いのほか当時の日本の状況と酷似していたため、内村の文章はあたかも〈予見の書〉のように受け止められ、むしろ戦前以上に高く価値づけられるようになったというのである。こうした〈再評価〉の動きは敗戦後すぐに生じたものと想像され、1941年、岩波文庫から刊行された内村の著作『後世への最大遺物』に併載されていた「今日の困難」、「カーライルの婦人観」2編に替えて「デンマルク国の話」が同文庫に収録されたのは1946年10月のことであった。

### 3

以上の経緯で戦後の多くの小・中学校国語教科書に掲載された〈デンマーク〉教材であるが、今後の課題としては、小・中学校国語教科書に掲載された〈デンマーク〉教材の詳細な内容分析をすることで、戦後日本において、〈デンマーク〉教材から、如何なる国民像を描き出そうとしていたのかを検証してゆくことで、現在の義務教育における国家意識の形成の教授法についての基礎研究となると言える。

### 注

<sup>1</sup> 阿武泉監修『読んでおきたい名著案内 教科書掲載作品小・中学校編』（日外アソシエーツ、2008年）を参照。本書には1946-2006年までに発行された小・中学校国語教科書掲載作品名が網羅されている。

<sup>2</sup> 出典：前掲『読んでおきたい名著案内 教科書掲載作品小・注学校編』より作成。

<sup>3</sup> 同前。

<sup>4</sup> 同前。

<sup>5</sup> 同前。

<sup>6</sup> 高橋健二（1902-1998）、日本のドイツ文学者でヘルマン・ヘッセやエーリッヒ・ケストナー作品の翻訳・紹介に努めた。そのほかにもゲーテやグリム兄弟など、ドイツ文学に関する著書・翻訳が多数ある。1958年、ドイツ文学を日本に紹介した業績によって読売文学賞を受賞。

<sup>7</sup> 内村鑑三（1861-1930）、明治・大正期に活躍した宗教家・評論家。札幌農学校在学中に受洗。渡米してアマースト大学に学ぶ。1891（明治24）年、第一高等中学校教員のときに教育勅語への礼拝を拒否したと疑われて（不敬事件）職を追われた。雑誌『聖書之研究』のなかで平和を説き、無教会主義を唱えた。

<sup>8</sup> 今日の西新宿と北新宿にあたる地域。内村に感化された実業家の今井館太郎の未亡人ノブの寄付により、1907年末に内村の活動のための建物が建設された。それが今井館と呼ばれるようになり、無教会主義キリスト教の本拠となった。1908年6月の『聖書之研究』第100号刊行の祝いを兼ねて、今井館の開会式が行われた。